



『幼児の秘密』
— 集中する子どもの発見 —

『幼児の秘密』 マリア・モンテッソーリ 著
中村勇 訳 (日本モンテッソーリ教育総合
研究所 2004年)

評者 早田由美子
(大学教員)

モンテッソーリ教育の広がりと
子どもの発見

マリア・モンテッソーリは明治維新の二年後の一八七〇年に、イタリアのアドリア海に面するアンコーナという地方都市に生まれた。

日本でも、第二次世界大戦が終わるまで、一部の大学(二〇二五年NHK朝のドラマ「あさが来た」で描かれた日本女子大学など)を除き、女性が大学で学ぶことはできなかったが、イタリアでも男女差別は激しく、大学の壁は厚かった。それでも医学を志したかったモンテッソーリは、交渉の末、ローマ大学医学部に女性として初めて入学し、医師となった。一八九六年のことである。

医学生の中から障害児の治療と教育に携わり、その実績を生かしてスラムの子どもの保育を行い大きな成果を上げ、八十二年間の生涯で数多くの業績を残す。子どもに関する本もたくさん刊行している。その本は何か国

早田由美子 (はやたゆみこ)
千里金岡大学生生活科学部児童学科教授。学術博士。専門：保育学、保育思想。著書：『モンテッソーリ教育思想の形成過程—「知的生命」の援助をめぐる—』(勁草書房)他。

語にも翻訳され、今日もなお読み継がれているだけでなく、世界一七か国二万二〇〇〇の園・学校で彼女の思想と方法に基づいた実践が行われている。園・学校というのは、保育園、幼稚園を中心に、小学校、中学校、高等学校でも実践が行われており、それらを合わせた数である。日本で六〇〇一〇〇〇箇所あるといわれているモンテッソーリ園のほとんどが幼児教育の場での導入であるが、世界での広がりには幼児教育の分野にとどまらないのである。インドには世界で最も生徒数が多い「シテイ・モンテッソーリ・スクール」がある。生徒数はなんと約四万五〇〇〇人とのこと！

一九一七年、ローマに最初に設置された保育施設「子どもの家」は、来年、開設一〇周年を迎える。世界における広がりや長年にわたる高い関心の継続の理由は何であろうか。その最も大きな理由は、彼女が発見した子どもの姿にある。

それを知るには、園の子どもの様子を間近に見るのが一番の早道である。インドのマハトマ・ガンジーも、「子どもの家」を訪れたときに見た子どもの姿に心打たれ、インドにモンテッソーリ教育を導入することを決意したほどである。彼はその感動を次のように表現している。

「ここロンドンで彼女と彼女の子どもたちに出会うことを待ち望んでいた。私にとっては、これらの子どもたちが静寂の徳へと導かれるのを見るのは、言葉にならないほどの喜びである。その香り高い平和の中で、子どもは教師によるほんの少しの誘いに応えて進む。そのリズムカルな動きを追うのは言葉にできないほどの喜びである。」(傍点筆者)

このように、ガンジーは「子どもの家」の子どもの姿を目の当たりにし、心打たれ、「言葉にできないほどの喜び」を感じている。そして、物事に集中して取り組む子どもの姿を「静寂の徳」と記している。

さて『幼児の秘密』（一九三六年）には、モンテッソーリが発見した子どもの様子はどのように描かれているであろうか。それは、注意を集中する子どもの姿である。

「私が注意を引かれた最初の現象は、三歳ぐらいの一人の女の子が見せたものでした。それは〈円柱さし（はめこみ円柱）〉という教具を用いた練習で、円柱をブロック（角柱）にあげられている穴に入れたり出したりします。びんの栓を扱うのと似ています。しかし十本の円柱は大きさが段階的に異なっていて、一本一本がブロックの対応する場所に入るようになっていきます。

そのように小さい女の子が、強い興味を示して何回も何回も〈円柱さし〉の練習を繰り返すのを見て、私はびっくりしました。そのやり方が速くなったり上手になったりするわけではありませんでした。ある種絶え間ない

動きがあるだけでした。私は検査するときの習慣で、練習の回数をかぞえ始めました。それから、私の目に行っている不思議な集中がどの程度まで持ちこたえられるか試してみようと思いました。ほかの子どもたちすべてに、歌をうたわせたり動きまわらせたりするように、教師に頼みました。実際に子どもたちはそうしました。女の子はまったく取り乱さずに、作業をつづけました。次にはその子の座っている肘かけ椅子ごと、そつとテーブルの上に置きました。女の子はすばやく教具をつかんで膝の上に置き、同じ作業をつづけました。女の子は、私がかぞえ始めてからでも、四十二回練習を繰り返しました。そして、夢から覚めたように練習をやめ、幸せな人のようにほほえみました。周りを見まわしたその目は、光りかがやいていました。」

「その女の子はまだほんの小さい子どもでした。その年齢では、注意力は不安定で捉えどころなくて、とどまることなくものからもの

へと移っていきます。それにもかかわらず、自我がいつさいの外部の刺激を受けつけないほど集中するという事実が起ったのでした。この集中には、精密で科学的に段階づけられた教具に關係するリズムミカルな手の動きがともなっていました。」

「同じような出来事が繰り返し起りました。集中したあと、子どもたちはその都度、元気を回復した、生命力にあふれた人間になりました。その様子は、大きな喜びを味わった人間のように見えました。」

集中する子どもには、生命力がよみがえり、幸せと喜びにあふれるというこの現象は、モンテッソーリ教育のカギとなるものであり、これを知っているといえないでは子どもも理解が大きく異なるような重要な発見である。注意の集中を繰り返すと、落ち着きのなかつた子どもも変容し、落ち着き、知的好奇心が増し、社会性も生まれる。

集中する姿は、自ら選んだ内容を心ゆくま

で繰り返すことができたときだけに現れ、大人の決めたスケジュールの中で、自分の興味・関心とは異なることをさせられている中では決して見られない姿である。

時間的な余裕、空間的な余裕、子どもが選んだ目標のある内容、子どもの心の尊重、保育者の理解などの条件がそろって初めて初めて可能な、しかし、全世界で今この時も繰り返し確認され続けている子どもの奇跡的な姿、しかし、そのような環境では当たり前のように日常的に見られる姿なのである。

モンテッソーリは『幼児の秘密』のほか、『小学校における自己教育』（一九一六年）や『子どもの心―吸収する心』（一九四九年）など多くの著作の中でもこの姿を記している。

集中する子どもの姿について、脳神経科学の発展の成果を生かした分析もなされている。アメリカの神経学者K・ランバートは、モンテッソーリを「手の運動と関連のある脳回路の活性化に注目した先駆者として、心理学の

世界でもっと尊重されていい存在だと思っ
と評価する。

ランバートは、本誌第一一四巻第四号でも
紹介されたフロア理論をモンテッソーリに適
用した。フロア理論とはアメリカの心理学者
M・チクセントミハイが提唱するもので、好
きな作業に没頭することで『らくらくと川の
流れ（フロア）に運ばれるような』快適な精
神状態になることを発見した』ことからこの
名が付いている。好きなこと、特にやりがい
のある仕事をしていると、ほかのことは何も
気にならなくなり、活動そのものが楽しく、
最高の幸せを感じるというものである。

科学的に言うと、意欲をもって作業し満足
感を得る運動の作用で、脳内の「側坐核とい
う部位に快樂物質ドーパミンが放出され、快
感を感じる」ということである。[※]

われわれは、いろいろな目的で日々活動
を行っている。日々の糧を得るため、名誉や評
価を受けるためなどもあるだろう。しかし、

活動それ自体が楽しくやりがいがあるとき、
人は真の喜びにあふれるのである。

終わりに

本書は一九三六年に出版されたという意味
では古典であるが、ここに描かれている子ど
もの姿は、条件がそろっていれば現在なお日々
世界中で見いだされており、その意味で現在
進行形の子どもの姿である。保育者や保護者
が知り、子どもを尊重することにより、大人
も子どもも幸せになれる真理が存在している。

注

- 1 P. Giovetti, Montessori, Mediterranee,
2009, p. 81.
- 2 マリア・モンテッソーリ『幼児の秘密』
中村勇訳 日本モンテッソーリ教育総合研究
所 二〇〇四年 pp. 140-141
- 3 ケリー・ランバート『うちは手仕事で治る！
なぜ昔の人はうっにならなかつたのか』木村
博江訳 飛鳥新社 二〇一一年 pp. 82-83